

交わらなかつた議論

—— 吉本隆明『「反核」異論』をめぐつて

村上克尚

本稿は、吉本隆明『「反核」異論』（深夜叢書社、一九八二年）が登場した背景、およびの同書の論点を整理したうえで、それぞれの論点に対応する「核戦争の危機を訴える文学者の声明」への署名に参加した文学者たちの言説を取り上げ、当時必ずしも交わらなかつた両者の議論について再考しようとするものである。

1. 『「反核」異論」登場まで

吉本隆明の『「反核」異論』は、一九八一年の「核戦争の危機を訴える文学者の声明」とその署名運動に対する批判として書かれた複数の文章をまとめて出版したものである。ここでは、『「反核」異論』が登場した背景について、簡単に整理しておきたい。

一九七九年十二月、ソ連による中距離核ミサイル・SS20の東欧への配備に対抗するために、NATOはソ連に対して軍縮を

求めたうえで、それが受け容れられない場合には、イギリス、西ドイツ、イタリア、オランダ、ベルギーに巡航ミサイル、さらに西ドイツに中距離核ミサイル・パーシングIIを配備することを決定した（いわゆる「二重決定」）。一九八一年一月にアメリカ大統領に就任したロナルド・レーガンは、ソ連に対する強硬姿勢をアピールするとともに、同年十月には「ヨーロッパでの限定核戦争もあり得る」と発言。これによつて煽られた危機感を背景に、ヨーロッパ各地で、反核を掲げた万単位のデモが行なわれるにいたつた。

同年十一月には、川崎市で開催された「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ（AALA）文化会議」の席上で、西ドイツの作家のハンス・ペーター・ブロイエルが参加者に反核の署名を訴えた。それを受けて、十二月に、中野孝次を代表とする三六名^①が呼びかけ人となり、「核戦争の危機を訴える文学者の声明」への

署名運動が開始された。ただし、もともとこの運動は、雑誌『文學的立場』を刊行していた小田切秀雄、伊藤成彦、西田勝らによって発案されたものであり、党派色が強くないがゆえに多くの賛同者が見込めるという理由で、ドイツ文学と関係が深い中野が代表に推されたとの証言がある⁶⁾。一九八二年一月には、中野らが東京第一ホテルで記者会見をし、これを各紙が取り上げたことで、署名運動は世間に広く知られるようになった。

しかし、知名度が上がるとともに、署名への疑義も寄せられるようになる。

同年二月には、結^す秀実が「『排除の力学』が働く構造」で、「反核を絶対に許容しないような力学がそこに働いている」として、反核声明を「ファシズム」と批判した⁶⁾。三月には、中上健次が小説「鴉」のなかで、「反核声明を「マルデ大政翼賛会ミタイ」としたうえで、「人類ノ悪ハ他ノ生物ノ善力モシレナイノニ」とその「人間中心主義」を批判した⁴⁾。四月には、柄谷行人が「反核アピールについて」で、アンドレ・グリユックスマンを引用しつつ、「国家、人種、社会体制の違い」をこえたようなこの運動は、明らかにポーランド問題を隠蔽し、ソ連という「国家」の利益のためになされている」と批判した⁵⁾。このように、『「反核」異論』以前に、当時三〇代から四〇代前半の若い文学者たちによって、吉本が後に提出する論点は先取されていた。

そのほかに、別の角度からの批判も存在した。雑誌『批評精神』に拠った天野恵一や池田浩土らは、声明の「あらゆる思想信条の相違を超えて」という「幅広いズム」によって、原発や日米安保に賛同する者まで署名に加わっている状況で、いったいどのよう

な有効な行動ができるのかと批判した⁶⁾。また、「ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)」で長く活動した吉川勇一は、「ベトナム反戦運動の体験やそこから得た貴重な教訓がすっかり消えて、一九五四年の原水爆禁止運動に舞い戻った感じがする」という知人の言葉を引用しつつ、第三世界への加害の視点を欠いた反核運動のあり方について苦言を呈した⁷⁾。

以上のような批判にさらされつつも、声明への賛同署名は、最終的に五六二名に達した。文芸誌『すばる』は五、六月号に、「文学者の反核声明 私はどう考える」と題して、「この声明に、あなたはどうのお考えをお持ちでしょうか」というアンケートに対する一三八名ぶんの回答を掲載した。この回答においても、署名の有効性や「文学者の」という限定に対する疑義、またこのようなアンケートを行なうこと自体についての批判が提出されている。

その後、日本の反核運動は、六月の第二回国連軍縮特別総会(SDII)を目指して、各地の自治体や民間団体によって反核アピールが出されるとともに、五月二十三日の「核兵器廃絶と軍縮をすすめる82年平和のための東京行動」のデモに主催者発表で四〇万人が参加するなど、大きな盛り上がりを見せた⁸⁾。

この年の四月から、吉本は反核運動に対する批判を精力的に続けていた。そして、十二月に『「反核」異論』が出版される。以下では、吉本の『「反核」異論』に収められた諸文章の論点を三 points に絞ったうえで、その批判の妥当性について検討していく。

2. 「党派性の隠匿」

吉本の『「反核」異論』の第一の論点は、反核声明は普遍的な正義を装う言説の裏側に、ある党派性を隠匿しているのではないかというものだ。

吉本は「停滞論」（初出『海燕』一九八二年四月）において、中野孝次らの「署名についてのお願ひ」の「核戦争の脅威が人類の生存にとっていっそう切実に感じられるようになってきました」という文章を引用したうえで、次のように批判する。

もちろんわたしは、かれらにむかって、君たちは「人類」としてそんなに「生存」が心配なのかとか、君たちは誰からも非難や批判を受けなくてすむ正義を独占した言語にかくれて、そんなにいい子になりたいのかと半畳を入れたいのだ。そして誰からも非難されることもない場所で「地球そのものの破壊」などを憂慮してみせることが、倫理的な言語の仮面をかぶった退廃、かぎりない停滞以外の何ものでもないことを明言しておきたい。（一〇・一一）

この箇所における主張は明瞭だ。「人類」という普遍的な主題で語られる言説が、政治において重要な敵対性をあいまいにし、自分たちを「いい子」の側に組み入れるというアリバイ作りに墮してしまっているのではないか、ということだろう。

そのうえで吉本は、ヨーロッパの反核運動の盛り上がり、一

九八一年十二月にソ連とヴォイチエフ・ヤルゼルスキ政権が、ポーランドの「連帯」（レフ・ヴァウエンサらが結成した独立自主管理労働組合）を弾圧した事件を隠蔽することになったと指摘する。

東西ドイツを発祥地として、突如としてヨーロッパに反核平和運動が高揚し、それがアメリカの挑発による核戦争の危機という宣伝文句で街頭運動を組織して、大衆の関心を惹きつけていった。故意か偶然か、それをかくれみのに、ソ連とポーランド軍部官僚は、ヨーロッパで、もつとも先進的な社会主義の要求を提起したポーランドの労働者、知識人、市民の運動を、「非核」武装力で、もつとも徹底的に苛酷にたたきつぶしてしまつたのだ。（一一）

吉本は、これに先立つ「ポーランドへの寄与——レーニン以後はじめての社会主義構想」（初出『中央公論』一九八二年三月）で、ポーランドの「連帯」の運動を「かつて初期レーニンによって固執され、すぐにこの地上から消えてしまった社会主義の理念を、はじめて復元しようとする無意識の欲求がみられた」（一三八）と高く評価していた。この評価の内実ここで深く立ち入ることはしない。ただ、吉本からすれば、社会主義の理想化という課題を放棄し、ポーランドの「連帯」の弾圧についても言及することがない反核声明が、非政治性を装いつつマイナスの政治性を発揮しているように映つたことは想像に難くない。

（ここまで「停滞論」まで）であれば、吉本の批判にも妥当性を認められなくてはならない。しかし、四ヶ月後の「「反核」運動の思想

批判—(初出『週刊読書人』一九八二年八月)になると、「このなかに公開してある「署名についてのお願い」の文章は、米国のレーガン政権のヨーロッパにおける限定戦略の決定について危惧が表明してあるが、ソ連の対ヨーロッパ限定核戦争用のミサイルの配置にひとつも言及してない。背景にうまく匿しているが特定の「党派」的なものだ」(二七)という断言にトーンが変わる。また、鮎川信夫との対談「崩壊の検証——「反核」をめぐる(戦後)理念の終焉」(初出『現代詩手帖』一九八二年八月)でも、「ソ連の戦略にうかうか乗った、欺されたつていうほど単純なことじゃないんで、心からそれでいいと中野孝次、小田実、小田切秀雄らはそう思っているのです」(二三三)と名指しの批判がされる。こうして、反核声明の発起人が積極的にソ連を支援していると主張する陰謀論に達することで、それ以降の生産的な議論が妨げられてしまうのである。

この吉本の論点に対して、どのような反論が可能だろうか。ここでは、「すばる」の「文学者の反核声明 私はこう考える」に寄せられた、仏文学者の渡辺一民の回答に注目したい。

最近ヨーロッパ、とりわけフランスでは、ポーランド問題を引きあいに出したうえで、西ドイツをはじめとする西欧の反核武装運動は、核戦争にたいする恐怖からソヴェトの全体主義に屈服し自由を放棄するものだという批判が、良心的と目されてきた知識人のあいだからつきつきとあらわれ、事実上ミッテラン社会主義政権の推進する核武装を支持する結果となっておりす。それは自由か隷属かという二者択一を迫

って、自由のための死をあえて選ばせるものと申せましょう。むろんこの主張の根底にあるのは核の恐しさの認識の甘さにほかなりませんが、今日反核武装運動をすすめる以上、そのような問題の側面のあることを忘れてはならないでしょう。そしてわたくしはそうした問いかけにたいして、「ヒロシマ」「ナガサキ」ばかりでなく、国体を守るため玉砕を強いられたいわたくしは日本人の過去の経験から、あえて自由より生きることを選ぶことが正しいと答えたい。そこまで考えてわたくしはこの署名をいたしました。⁹⁾

渡辺は、反核運動はソ連を利用するものだという言説について、核兵器体制において、国家の独立・自由を至上命題とする立場を突き詰めていけば、全面的な核戦争にいたるしかないという見解に立って、批判を試みている。国体を守るための玉砕を強いられた歴史を背負う日本の国民だからこそ、「自由か隷属か」というレトリックの危うさには十分自覚的であるべきだ。いずれの陣営を利用するかではなく、国家という枠組みを超えた発想のもと、人びとの生命に対する脅威を縮減するということを行動の基準に据えるべきだ、というのが渡辺の主張だと思われる。

加藤周一も、吉本に対して次のように応えている。

人間万事、右に行っても左に行ってもソ連を利用するかアメリカを利用するかというのは、冷戦の考え方があらゆるところに浸透したということで、実に自由な独立なものの考え方がないですね。冷戦「ヒステリー」です。核兵器の問題は、大

きくえば人間全体の問題です。身近な問題として言えば、われわれ自身の生存に関しているわけでしょう。われわれの生存をなんとかして守ろうという時に、その結果としてアメリカとソ連のどつちが喜ぶかと心配するのは、ずいぶん論点がズレている。⁽⁶⁾

加藤が言うように、吉本の『「反核」異論』は、冷戦体制、あるいは国家という枠組みに限界づけられている。反核運動は決して、「誰からも非難や批判を受けなくてすむ」わけではない。反核の運動は、核兵器の放棄を決して肯んじない国家と、生存を脅かされ続ける民衆のあいだに明確な敵対性を設定する。反核の運動を貫くとき、国家からの弾圧は強まっていく。そこに、反核運動はいずれの国家を利用するのかという発想を持ち込むことは、かえって問題を矮小化することに繋がるのではないか。

3. 実効性への懐疑

吉本の『「反核」異論』の第二の論点は、署名運動の実効性が疑わしい、それは結局発起人たちの自己満足に終わるのではないかというものだ。

「停滞論」において、吉本は次のように批判する。

この両国（アメリカとソ連）が兵器生産を放棄し、一方は平和な力ウ・ポーイの国に、他の一方は半アジア的な平和なミール共同体の国にもどってくれたら、世界はこれにならう

ことになり、住みよくなるにきまつている。だがわたしたちは、冗談をいいたいのではない。そのためには、こういうことを望むじぶんの「人間性」をSFアニメのいつも客体化していることがどうしても必要だとおもえる。現在の段階で、かれら米ソ両国が国家の崩壊を賭けてまで、核をはじめとする兵器、軍需生産をやめるなどに到底かんがえられないからである。（二四・一五）

署名によつて国家の善意に訴えるなどということは悪しきヒューマニズムにすぎず、SFアニメ的な空想にほかならない。重要なのは、現実主義に基づいた変革のための行動なのだ、という主張だと思われる。

これに対しても、加藤周一はやはり正面からの批判を試みていく。

日本のヴェトナム反戦はジョンソンを追い込まない。しかしヴェトナム反戦を日本でやって——小田「実」さんたちがやったことだけでも——それをアメリカの反戦と関係づけたということは、これは画期的なことです。アメリカの新聞に意見広告を出して、実際にどれだけの効果があったかは言えないけれど、アメリカのなかのヴェトナム反戦と日本のなかのそれが関係し影響を与えあっていたことは、確かでしょう。核兵器の問題でも同じことで、日本のなかだけでいくらずつても、日本政府には多少影響を与えたいと思いますけれど、外国の政府に影響を与えるところまでは、とうてい行かない

と思います。しかし、被爆国日本の反核運動が高まれば世界中の反核運動を力づける。そこで初めてそれぞれの政府に影響を与える。ですから全く「効果」がないわけではない、ということが私の言いたい第一点です。⁽¹¹⁾

ここで加藤は、日本でのベトナム反戦運動を例に出しつつ、ある国で行なわれた反対運動は必ずその外部へと波及していくことを語っている。それは直ちに劇的な変化を引き起こすわけではないが、相互に繋がりが合うことで、運動を持続的にしつつ、新たな可能性を生み出していく。この意味で、被爆国である日本の人びとがこの運動に加わり、声をあげることの意味は小さくないと強調されるのである。

興味深いのは、加藤が成功体験としてベトナム反戦運動を挙げていることだ。というのも、吉本が署名運動を一蹴するとき、そこには六〇年安保で既成政党が組織した請願デモ（お焼香デモ）に対する怒りがオーバーラップしていたのではないかと推測されるからである⁽¹²⁾。もし吉本にとって、社会変革のための参照点が六〇年安保であり、加藤にとつてのそれが六八年前後のベトナム反戦運動なのだとするならば、両者の差異は見かけ以上に大きいことになるだろう。

実際、吉本は、「反核」運動の思想批判 番外（『週刊読書人』一九八二年十月）で、「反核」、「反原発」、「差別問題」、「身障者問題」を併置したうえで、それらを「社会主義」の理想化の課題を断念し、ヒューマニズムと社会政策の課題に転化する⁽¹³⁾こと（五六）として批判している。ここで、六八年以降に出現した社

会運動はまったく歯牙にかけられていない。吉本にとつて、「陣地戦」（アントニオ・グラムシ）は本質的な意味を持たず、重要なのは、社会主義の理想化と権力奪取のための革命（「機動戦」）だということになるだろう。『反核』異論』には、ミクロナ闘争が思いがけないかたちで繋がりが合つて、全体として大きな効果を上げるというヴィジョンを見出すことはできない。

他方、大江健三郎のルポルタージュ『広島からオイロシマへ』においては、このような繋がりが印象深く描き出されている。以下は、大江が一九八二年三月二十七日に西ドイツのフライブルクで観た街頭劇の様子だ。

フライブルクの街頭劇の場合、パンフレットとしてあらかじめくばられてもいた台本が、しっかりとったものだった。状況設定は、死の国の入口ということで、椅子に坐つた、顔から鉢にかけて焼けた、たれたように黒く塗つた老年の男がうなだれている。そこへやはり黒く塗つた若者があらわれる。若者は嘆きの声、恐怖の声をあげている。若者はオイロシマ、すなわち広島⁽¹⁴⁾の悲惨がそこにも実現してしまつたヨーロッパ、という名を持つているのだが、——自分がなんとという恐しいものを見てしまったことか、体験してしまつたことか、と嘆く。「中略」ところが若者を待ちうけていた男は——これはヒロシマと名づけられているのだが——この若者に憐れみ、あるいは同情をあらわすどころか、大きい怒りを示すのだ。そしてかれが朗唱するように語る告発の言葉が、劇の後半を占めるのである。——広島でおなじ悲惨、おなじ恐怖は、

すでに人間によって体験されていたのだ。また長崎で。われわれは広島・長崎について声をたかめて語ってきたではないか？ それもとくにヨーロッパの、知的に高く、情動も深い人びとに語りつづけてきたではないか？ それにもかかわらず三十五年以上も、あなた方は、核の災厄がせまつていることについて、反応をあらわさなかったのだ。⁽¹³⁾

「オイロシマ」とは、当時西欧の反核運動で盛んに使われていた「ユーロシマ」（ヨーロッパ＋ヒロシマ）のドイツ語による読み方である。大江の記述に従う限り、街頭劇の筋立ては単純なものとはいえ、ヨーロッパがこれまで広島、長崎の被爆を他人事としてしか捉えてこなかったこと、そしてこの機会に異なる諸地域が関係を結び合い、互いの経験を賦活し合うことが必要だということとを訴えるものとなっている。運動を孤立させてはならず、まずは声をあげ、繋がり合うことによって、様々な可能性が見えてくることがある。

そのことを感じさせるのが、金石^{キムソクホム}の『すばる』のアンケートに対する回答である。金は、「現在、東北アジアへの戦域核配備が云々されているが、その場合それが米日韓の軍事同盟形成によって支えられるのは周知の事実となっている」としたうえで、次のように述べている。

〈声明〉に署名をしたからといってそれがすぐ、実効を持つと考えている人は一人もいない。私についていえば、私はこれまで核にあまり関心を払ってこなかったが、だいたい全

斗換政権のやることについてさえ、それこそ日本の安全地帯において無力感をかこっているような人間なのである。まして核においておやというところであつて、その想像だけで、出たとこ勝負の絶望的な気持を持っている。

私は「核戦争の危機を訴える文学者の声明」に触発される思いだった。私は実際の選挙権は持っていないが、一票を投ずる気持で署名をし、そのなかに小さな自分の意思を表明したいと思つたのである。⁽¹⁴⁾

当時の韓国の米軍基地には約一〇〇〇発の戦術核兵器が配備されていたと言われており、朝鮮半島における核戦争の脅威は日本の比ではなかった。一九八〇年、光州の民主化運動を暴力的に弾圧し、大統領となつた全斗^{チョンドフアン}換は、翌年のレーガンとの会談を通じて、ジミー・カーター前大統領が掲げていた在韓米軍撤退を白紙に戻させ、両国の軍事同盟を強化する方向に舵を取つた。

金の回答は、日本・韓国の核兵器をめぐる軍事的な状況に強い異議を持ちつつもそれを投票というかたちで意思表示できない朝鮮半島出身の人びとが少なからず存在すること、そして日本において反核運動に関わるということは、米日韓という三位一体の軍事同盟を根底から批判することにほかならないということを改めて教える。このような回答を喚起し、内側に閉じこもりそうになる運動の視野——実際、朝鮮半島について言及した回答は金のもの以外には見当たらない——を賦活するという事態こそ、反核の署名運動の重要な効果だと言えるだろう。

4. 文学と自立

吉本の『「反核」異論』の第三の論点は、文学者にとつて重要なのは個の自立とその表現であり、反核の署名はそれを明け渡すことを意味するというものだ。

これは、桂の「ファシズム」や中上の「大政翼賛会」という批判とも繋がる論点だ。実際、吉本は、三浦雅士との対談「現代と若者」（初出『平凡パンチ』一九八二年四月）で、自らの反核声明への批判について、「単独でいかないといけない。単独でやらないとあの連中と同じ次元になっちゃう」、「ぼくはその恐ろしさを戦争中によく知っている。つまり、戦争中はそうなんです」（八〇）、「これは文学報国会の裏返しだと思っっているわけです」（八一）と語っている。

この吉本の姿勢は、「反核」運動の思想批判」での、栗原貞子への批判に最も良く表われている。栗原は、中上の「鴉」について、「このような作品は、ヒロシマ、ナガサキの三十万の死者を冒瀆し、今なお放射能の後遺症に苦しむ三十七万の被爆者を侮辱し、世界の反核運動に立ちあがった民衆に挑戦するものです」（『批評精神』一九八二年六月）と抗議した。吉本はこれに対して、次のように痛罵する。

いったいこの人物（栗原貞子）は、いつ誰の許可を得て「ヒロシマ・ナガサキの三十万の死者」や「後遺症に苦しむ三十七万の被爆者」や「世界の反核運動に立ちあがった民衆」の

代弁者の資格を獲得したのか。思い上りや甘ったれもいい加減にしろ。お前がどんな文学者かわたしは知らぬが、お前はお前しか代弁することはできやしない。そのことが（文学）の意味であり（民衆）ということの意味である。お前はほんとはそのどちらでもないんだ。こういう言辞を中上が原爆ファシズムと評するのは当然である。（三〇）

確かに栗原の文章については、死者の権威を笠に着て相手の反論を封じようとする姿勢があることは否めず、この点で吉本の批判にも妥当性が認められる。この吉本の批判に、「ジェノサイドのおそろしさ」を「ひとりひとりの死がないということ」に見たうえで、「峠三吉の悲惨は、最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である。この悲惨を不特定の、死者の集団の悲惨に置き代えること、さらに未来の死者の悲惨までもそれによって先取りしようとすることは、生き残ったものの不遜である」⁽¹⁵⁾と論じた、石原吉郎の反響を聴き取る者もいるかもしれない。

しかし、吉本は次のように続けている。

わたしはこういう人物に対しては断乎として主張する。平穩な日常生活のなかで脳卒中の後遺症に苦しむ人も、老衰による自然死も、「ヒロシマ・ナガサキ」の被爆者の後遺症や、その死とまったく同等であり、「世界の反核運動に立ちあがった民衆」も、そんなものになつこう立ちあがらずに平穩な日常生活をその日その日なんとなくすごしている民衆も同等である、と。「反核運動に立ちあがった民衆に挑戦」するの

が不当ならば、そんなものについてこう立ちあがらないその日ぐらしの民衆に「挑戦」するのも不当なのだ。(三〇)

ここで吉本は、被爆の後遺症と脳卒中の後遺症を、原爆による死と老衰による自然死を等置している⁽²⁶⁾。このような等置が成り立つのかについては後述する。それよりもまず、「反核運動に立ちあがった民衆に挑戦」するのが不当ならば、そんなものについてこう立ちあがらないその日ぐらしの民衆に「挑戦」するのも不当なのだ」という相対主義の極みのような言説から、吉本の被爆者への徹底した無関心が読み取れることを指摘しておきたい。石原吉郎による批判の底には、ジェノサイドによる無数の死者たちの声をひとまとめにして代弁してしまうことなく、どれだけ困難であつても、一人一人の固有の名前や声を取り戻す努力をしなければならぬという義務感があつた。他方、吉本の批判（お前はお前しか代弁することはできない）は、他者に関わること自体の否認として現われており、両者の質的な差異を見過ごすことはできないだろう。

「核戦争の危機を訴える文学者の声明」は、政治的な効果のみではなく、文学の面においても重要な結果を残した。それが、署名者のなかの有志によつて企画された『日本の原爆文学』全十五巻（ほるぶ出版、一九八四年）の刊行である。そこに収められた原爆文学を紐解けば、吉本の言説の問題点はさらに明瞭になる。

編集世話人の中心人物である長岡弘芳は、大田洋子の「半人間」について次のように述べている。

大田洋子さんは睡眠薬やいろいろな薬を飲んだりして、薬害によるある種の不安神経症に襲われまして、何回も精神病院へ入院を繰り返しました。彼女の代表作の一つ『半人間』という作品は、彼女が持続睡眠療法を受けているときの記憶をたどつたものですが、一晩で髪の毛が白くなつたような、あるいは四つんばいにならないと歩けないような、そんなつらさに耐えてまで、大田さんという人は原爆を書きつづけてきたのでした。「大田洋子は原爆ものしか書けないのか」、「原爆ものを売り物にしている」とひどい悪口もいわれたのですけれども、ともかく彼女は耐えて、書き継いできたのでした。⁽²⁷⁾

「原爆ものしか書けないのか」、「原爆ものを売り物にしている」という浅薄な批判を、吉本も踏襲しているのではないか。原爆文学は、多くの場合、生き残つた者の証言というかたちをとらざるを得ず、死者たちの表象^{||}代理という問題に直面せざるを得ない。このような原爆文学が抱え込む固有のアポリアを一顧だにせず、「お前はお前しか代弁することはできない」と言い放つことが、いかに暴力的なふるまいなのかを考えなくてはならないだろう。

また、同じく同叢書の編集世話人だつた大江健三郎は、次のように言っている。

私たちは日本人として、被爆した人たちが文学者としてどのように考えて文学を作ってきたか、また被爆しない日本人

が文学者として、被爆した人たちといっしょになつて核状況をどのよう¹⁸⁾に考え、またどのような文学を作つてきたかを、知る必要があると思います。そのためのいちばんの手がかりになるのが、原爆について書かれた文学であると思います。私は文学そのものにそれほど力があるとは思つていませんけれども、実際にさまざまな行動をする場合に、その中心に据えて、それを足場にして、またそれを手がかりにして、自分の行動、態度を決める——（ジョージ・ケナンがケナンであるように、ケナンがクリスチャンであることをみずからの基盤にして考えているように、私たちが被爆した国の日本人であることを基盤にして考え、行動するとすれば、たとえば原民喜の作品が、あるいは林京子さんの作品が、私たちの力を与えるということではないでしょうか。¹⁸⁾

原民喜の「夏の花」は、その冒頭に妻の墓参りの描写を置いている（「私は街に出て花を買つと、妻の墓を訪れようと思つた」、「炎天に曝されている墓石に水を打ち、その花を二つに分けて左右の花たてに差すと、墓のおもてが何となく清々しくなつたようで、私はしばらく花と石に視入つた」、「持つて来た線香にマッチをつけ、黙礼を済ますと私はかたわらの井戸で水を呑んだ」。これは明らかに、それに続く、原爆による大量死との対比のためだろう。いつどこでどのように死んだのかも分からない。そもそも、その人を記憶する者たちも炎のなかで死に絶えてしまつたかもしれない。「夏の花」は、そのような無数の追悼されることのない死で充滿している。そのような死を、「老衰による自然死」とどうしたら等置するこ

とができるのか。

あるいは、林京子の『祭りの場』や『ギヤマンビードロ』に収められた諸作品で、原爆による後遺症は、いつどのようなかたちで発症するか分からないもの、そもそも病状が出たからといってそれが原爆によるものかどうかはつきりと因果関係を突き止められないもの、だからこそ恐ろしいものとして描かれている。さらに、世代を超えて、子どもたちに受け継がれることがないとは言えないがゆえの恐ろしさもある。結局、被爆者はいつまでも、八月六日、ないし八月九日に繋ぎ留められ、連れ戻されてしまう。それを「脳卒中の後遺症」と等置することが妥当かどうか。問題にしたいのは、いずれの死や後遺症がより「重い」かという話ではなく、明らかに性質も成り立ちも異なる二つを「まったく同等」として済ませてしまう想像力の欠如である。

吉本は、「お前はお前しか代弁することはできやしない。そのことが（文学）の意味」だと言うが、それはあまりにも文学を狭く捉えてはいないだろうか。原爆文学は、手持ちの言葉ではとても表象し得ない事態に直面し、しかしそれを表象せねばならないという使命感との葛藤のなかで、主体の自立性が引き裂かれ、無数の他者たちの声に貫かれてしまうような語りを表現してきた¹⁹⁾。しかし、むしろそれが、文学の出発点なのではないか。吉本の言説は、個人の自立性の理念に依拠するあまり、このような主体や言語における他者たちへの根源的な依存性という事態を見過ごし、ひいては他者への責任という課題を取り逃してしまつていくように思える。

結論

吉本の『「反核」異論』が提示した論点は、それ自体としては重要である。自らが依拠する「正義」を根底から問い直すこと、運動が実効性を度外視して自己満足なものに終わっていないかを点検すること、自己の言説の権威づけのために他者の声を横領していないかに注意することは、いずれも不断に行なわれるべき課題だろう。

しかし、吉本の思想は、冷戦の構造によって強力に決定されており、『「反核」異論』ではとりわけその弊害が表われているように思える。吉本の出発点は、「スターリン主義」（全体主義）を乗り越えるために、個の「自立」を重視する点にあった。しかし、『「反核」異論』においてそれは、核兵器をもとに国家の自立性を担保しようとする主権の論理を超えられず、陣地戦の重要性を軽視させ、他者の苦しみへの想像力を奪うものとして機能してしまっている。

「文学者による反核声明」をめぐる論争は、文壇における新旧世代の派閥闘争のような様相を持ち、その後改めて検証されることが少なかつた。しかし、この論争は、核をめぐる議論を様々な場所で開催しており、『日本の原爆文学』刊行という重要な成果にも繋がっている。今後は、必ずしも『「反核」異論』を軸に据えた賛否の二項対立で見るのではなく、より広い視野からこの論争を位置づけ直す作業が必要になるのではないか。

注

- 1 呼びかけ人三六名は、井伏鱒二、井上靖、井上ひさし、生島治郎、巖谷大四、尾崎一雄、大江健三郎、小野十三郎、小田切秀雄、小田実、本下順二、栗原貞子、古浦千穂子、小中陽太郎、草野心平、黒古一夫、住井すゑ、高橋健二、高野庸一、夏堀正元、中里喜昭、中野孝次、中村武志、南坊義道、西田勝、埴谷雄高、林京子、藤枝静男、堀田善衛、本多秋五、星野光徳、真継伸彦、三好徹、安岡章太郎、吉行淳之介、伊藤成彦。
- 2 黒古一夫の証言による（桂秀実・菅孝行・黒古一夫・外山恒一「座談会 反核から反原発運動へ——一九八〇年代のオーラルヒストリー」『述』二〇一二年三月）。
- 3 桂秀実「排除の力学」が働く構造『日本読書新聞』一九八二年二月八日。
- 4 中上健次「鴉」『群像』一九八二年三月。
- 5 柄谷行人「反核アピールについて」『文藝』一九八二年四月。
- 6 天野恵一・池田浩士・菅孝行「抵抗としての『反核』とは何か」『批評精神』一九八二年六月。
- 7 吉川勇一「反核の論理——運動のなかから」吉川ほか『反核の論理——欧米・第三世界・日本』柘植書房、一九八二年、二七頁。
- 8 国際教育フォーラム編『反核・軍縮宣言集——一九八二年の証言』新時代社、一九八三年。
- 9 渡辺一民「文学者の反核声明 私はこう考える」『すばる』一九八二年五月、二九頁。
- 10 加藤周一・伊藤成彦・小中陽太郎・黒古一夫・小田実・星野光

徳・李恢成・西田勝「共同討議 再び、核戦争の危機に文学者はどのように対するか」『文学的立場』一九八二年九月（再録『核戦争の危機に文学者はどのように対するか』不二出版、一九八四年、一二四頁）。

11 同上、一二七頁。

12 吉本の六〇年安保の総括については、「擬制の終焉」（谷川雁・吉本隆明・埴谷雄高・森本和夫・梅本克己・黒田寛一『民主主義の神話』現代思潮社、一九六〇年）を参照。

13 大江健三郎『広島からオイロシマへ』岩波ブックレット、一九八二年、三八・三九頁。

14 金石範「文学者の反核声明 私はこう考える」前掲『すばる』四一頁。

15 石原吉郎「確認されない死のなかで——強制収容所における一人の死」『石原吉郎コレクション』岩波現代文庫、二〇一六年、一二頁。

16 このような主張も、吉本に先行して桂秀実が行なっている。桂は渡部直己との対談で、「核」で死ぬこと「交通事故」で死ぬこととどう違うんだろうね？ 交通事故に反対する「文学者の声明」というのはないわけだからな」と語っている（「文学者」とリキミ『道』一九八二年七月）。

17 長岡弘芳「原爆文学の系譜」『反核 文学者は訴える』ほるぷ出版、一九八四年、二三七頁。

18 大江健三郎「生き延びる希望としての文学」前掲『反核 文学者は訴える』七七・七八頁。

19 村上陽子『出来事の残響——原爆文学と沖縄文学』インパクト出

版会、二〇一五年。

※ 本稿は、第五七回原爆文学研究会（二〇一八年十二月二十二日、九州大学西新プラザ）における口頭発表に基づいている。貴重なコメントをいただいた方々に心から感謝申し上げます。